

母子身体接触遊びのマルチモーダルな時系列構造の分析 (中間報告)

早稲田大学大学院人間科学研究科 石 島 このみ
早稲田大学人間科学学術院 根ヶ山 光 一

Temporal structure of multimodal interaction in mother-infant tactile play

Graduate school of Human Sciences, Waseda University ISHIJIMA, Konomi
Faculty of Human Sciences, Waseda University NEGAYAMA, Koichi

要 約

触覚的体験が豊富な乳児期において、身体接触は母子の関係性を規定する重要なファクターであると考えられる。母子の自然な遊び場面においても、身体接触を伴った遊びがしばしば観察される。しかしながら、そこにおける母子のやりとりについての丁寧な検討は、未だほとんどなされていない。そこで本研究では、発達初期の母子の身体接触遊び場面においてどのような相互作用がなされ、発達のいかに変化するのか、そしてそれらの身体接触遊び体験が母子の関係性や乳児の社会性の発達にどのような意味や機能をもたらすのか、といったことについて、やりとりのマルチモーダルな時系列的構造に着目しながら詳細に検討する。本稿では特に、本研究の中間報告として研究の問題と目的、方法、現在の進捗状況について報告する。

【キー・ワード】 身体接触遊び, 母子相互作用, マルチモダリティ

Abstract

Tactile interaction is important in the early development of mother-infant relationship. It is very frequently observed in their everyday-life play, but has not been studied in detail. In this study, we try to examine the development of mother-infant tactile play in terms of its temporal structure of multimodal interaction for a better understanding of the meaning and/or function of the tactile experience in the relationship. This is an interim report of the theoretical background, aim, method, and the tentative analysis.

【Key words】 tactile play, mother-infant interaction, multimodality

問題と目的

発達初期の母子関係においては、抱き、授乳、おむつ換え、遊びなど生活のあらゆる場面で身体接触を伴う関わり合いがなされている。そこで生じる触覚的体験は、母子間に極めて強い疎通性・一体感を生むと共に、情動共有の舞台となっていると考えられ（根ヶ山, 2002）、母子の関係性を規定する重要なファクターの一つであると想定される。

しかしこれまで、身体接触体験がいかなるものか、それが子どもの発達にどのように関わるのか、といった基本的問題が意外なほど見落とされてきた（根ヶ山, 2012）。母子の対面場面における身体接触行動を対象とした研究はわずかに存在するが（例えば Tronick, 1995）、そこにおける相互作用についての丁寧な検討は、未だほとんどなされていないのが現状である。一口に身体接触と言ってもその行動型・対象部位は実に様々であり、それがもたらす意味も大きく異なってくる。従って、多様な身体接触がそれぞれにどのような特徴をもち、いかなるやりとりがなされており、それが発達のどのような意味や機能をもたらすのかを、一つ一つ丁寧に検証していく必要がある。

その端緒として、石島・根ヶ山（印刷中 a）は1事例の母子のくすぐり遊び場面に着目し、そこにおける相互作用について、詳細な検討を行った。その結果、生後6ヶ月半頃の段階において、母親がくすぐり刺激を乳児の顔の前に提示した際に、乳児が母親の顔と母親のくすぐる手を見る、母親がくすぐるしぐさを提示するだけで乳児がくすぐったがり反応を示す、といった行動が見られ、やりとりへの能動的参与と、乳児による母親の意図の読みとりの萌芽的現象が起きている可能性が示唆された。従来、乳児による意図の理解が成立するのは、乳児—物—母親という三項関係が成立する生後9ヶ月以降であるとされてきており（例えば Tomasello, 1999）、生後6ヶ月半という時期はそれよりもかなり早い段階であるため、慎重な解釈が必要である。しかしながら、くすぐり遊びにおいて、くすぐり刺激をもたらす母親の身体部位やくすぐられる乳児の身体部位を注意の対象とみなした時、その場が極めて三項関係的なものとなることは、注目に値する。これは「原三項関係 proto-triadic relationship」（Negayama, 2011）の一例であると考えられ、こうした母子の身体を媒介項とした自然な接触遊びのような場が、三項関係における意図の理解の成立への橋渡しの役割を担っている可能性がある。またそれはくすぐり遊びに限定されたものではなく、身体の一部を介して行われる母子の身体接触遊び全般においても、想定可能である。

また、これまで意図の読みとりや心的状態の共有は、主に「物と相手の顔の交互注視」が重要な手掛かりであるとされてきたが、それが意図の読み取りの絶対的な指標であるわけではない（大藪, 2004）ことに注意しなければならない。例えば近年、母子のやりとりに、始まり・盛り上がり・クライマックス・収束といった文脈（narrative）があることが指摘されており（Malloch & Trevarthen, 2009）、それはまたくすぐり遊びにも存在することも分かっている（石島・根ヶ山, 2011）。そうしたやりとりの時系列構造の変化とその知覚が、母親の心的状態の読みとりや、意図の理解を支えている可能性がある。しかもその時系列構造は、触覚・視覚・聴覚にまたがるマルチモーダルな枠組みであり、母子相互作用を包括的に検討するにふさわしい。

以上の問題意識をふまえ、本研究では、分析対象をくすぐり遊び以外の身体接触遊びにも拡張・発

展させ、発達初期の母子の身体接触遊び場面においてどのような相互作用がなされるか、それは発達のいかに変化するか、それらの身体接触遊び体験が、母子の関係性や乳児の社会性の発達にどのような意味や機能をもたらすのか、といったことについて検討することを目的とする。さらにその分析の切り口として、各モダリティにまたがる要素である、文脈などの時系列的構造に着目し、やりとりの“活性化の輪郭 activation contour” (Stern,1985; 行動の速さやリズム、声のピッチなどの、モダリティを超えた活性化レベルの時系列的变化) が母子間でいかに共有されるのかを正確に捉えるよう試みる。そうすることで、母子における身体接触遊びのマルチモーダルな時系列的構造について詳細に検討していく。

方法

(1) 対象

くすぐったさが本格的に発生し始める時期(生後5・6ヶ月)と三項関係成立前の時期(生後7・8ヶ月)の母子各10組ずつ、合計20組(予定)。

(2) 手続き

子育て支援施設の小部屋にて、ビデオカメラを用いて、10～15分間の身体接触遊びの自然観察を行う。撮影開始時母親に、なるべく身体を使った遊びを行い、その中で必ず一回はくすぐり遊びをするよう依頼する。遊びの開始・終了のタイミングや、遊び方、姿勢関係については一切指示しない。観察の終了時点は、母子の自然なやりとりを妨げないようにするため、遊びがひと段落した時点とする。

(3) 分析方法

身体接触遊びの種類、身体接触時の行動型、情動表出、発声ピッチ、視線方向などを分析対象とする。解析方法としては、母子の身体接触行動、情動表出、視線方向の時系列的变化を詳細に扱うため、マイクロ分析を採用する。マイクロ分析には、行動解析ソフトウェア Interact8 または Elan を使用する。さらにその結果に、母子の発声ピッチの分析結果を対応させる。その際、音声解析ソフトウェア Praat を使用する。また、これらの諸行動の連鎖について検討するため、行動カテゴリが多い場合でも先行行動と後続行動の連鎖の典型的パターンを抽出することが可能である DEMATEL 法(森, 1991; 具体的な研究例は川野・岡本, 2001)による分析を行う。DEMATEL 法による行動連鎖の解析には、統計解析ソフトウェア Canalysis を用いる。

予備研究と今後の方針

実験室や子育て支援施設よりも生態学的妥当性がより高いと想定される家庭において、いかなる身体接触遊びがなされているのかをあらかじめ確認するため、既に収集してあった生後4ヶ月から1年

までの 1 事例の母子の家庭での身体接触遊びについて、予備的に分析を行った。その結果、母親が乳児の手足を持って動かす、膝に乗せてゆする、タカイタカイをするなど、反復的に同一の運動を行うようなリズムカルな動きを伴った遊びがしばしば観察され、乳児はその遊びを発達的に楽しむようになっていたことが示唆された（石島・根ヶ山，印刷中 b）。そこで用いられているリズムは、その加速や減速によって、乳児にやりとりの文脈（narrative）を伝える重要な情報の一つとなっている可能性があり、本研究においても着目すべき点の一つであると考えられた。今後は本研究においてもそうしたやりとりがなされているか、確認していくとともに、その時系列構造パターンと発達の差異を明らかにしていく。

引用文献

- 石島このみ・根ヶ山光一（印刷中 a）. 乳児と母親のくすぐり遊びにおける相互作用：文脈の共有を通じた意図の読みとり. 発達心理学研究, 24(3).
- 石島このみ・根ヶ山光一（印刷中 b）. 母子におけるリズムカルな身体接触遊びの発達の变化. 乳幼児医学・心理学研究.
- 石島このみ・根ヶ山光一（2011）. マルチモーダルな音楽性に着目した分析手法の探索的検討 —母子のくすぐり遊びの成功・失敗事例に着目して—. 乳幼児医学・心理学研究, 20(1), 47.
- 川野健治・岡本依子（2001）. 特別養護老人ホームの食事介助場面における行為の協調. 行動科学, 39(2), 7-20.
- Malloch, S., & Trevarthen, C. (2009). *Musicality: Communicating the vitality and interests of life.* In S. Malloch & C. Trevarthen (Eds.), *Communicative musicality: Exploring the basis of human companionship.* (pp.1-11). Oxford: Oxford University Press.
- 森典彦（1991）. *デザインの工学*. 東京：朝倉書店.
- 根ヶ山光一（2012）. 対人関係の基盤としての身体接触. 発達心理学会[編], 根ヶ山光一・仲真紀子[責任編集], *発達科学ハンドブック 4 発達の基盤：身体, 認知, 情動.* (pp.119-126), 東京：新曜社.
- Negayama, K. (2011). *Kowakare: a new perspective on the development of mother-offspring relationship.* *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 45, 86-99.
- 根ヶ山光一（2002）. *発達行動学の視座*. 東京：金子書房.
- 大藪泰. (2004). *共同注意：新生児から 2 歳 6 か月までの発達過程*. 東京：川島書店.
- Stern, D. N. (1989). 乳児の対人世界 理論編, (小此木啓吾・丸田俊彦・神庭靖子・神庭重信, 訳). 東京：岩崎学術出版社. (Stern, D. N. (1985). *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology.* New York: Basic books.)
- Tomasello, M. (1999). 社会的認知としての共同注意. ジョイント・アテンション—心の起源とその発達を探る. (大神英裕, 監訳 山野留美子, 訳). (pp.93-117). 京都：ナカニシヤ出版. (Tomasello, M. (1995). *Joint attention as social cognition.* In C. Moore, & P. J. Dunham (Eds.), *Joint attention: Its origins and role in development.* (pp.103-130). Hillsdale, NJ: Laurence Erlbaum Associates.)

Tronick, E. Z.(1995). Touch in mother-infant interaction. In Field, T. M. (Ed.), Touch in early development, (pp53-65). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers.

